

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* 夏休みの過ごししかた *

深草 真由子

イタリアにサビーナと呼ばれる地方があることをご存知だろうか。ローマから北東に広がるあたり、おおざっぱにいうとリエティ県をさす。わたしは毎年夏休みにはこのサビーナ地方に行くことにしている。ふだん暮らしている南イタリアのカラブリアは暑くて暑くてどうしようもないが、ここは真夏でもずっと涼しく、過ごしやすい。八月の二週目になると、バカンスや帰省で多くの人がイタリア半島を北から南へと縦断するため、高速道路は大混雑するのだが、わたしの場合は南から北へむかうため、渋滞に出くわしたこともない。六時間とかなり長時間になるものの、爽快なドライブだ。

わたしがサビーナという地名をはじめて知ったのは、なにかの本で「サビーニ族の女たちの略奪」について読んだときのことだ。伝説によれば、ローマを建国したロムルスは国の存続のために子孫をのこす若い女を必要とした。そこでこの地方に住んでいたサビーニ族を脅かして、その娘たちを誘拐し、ローマ人の子を産ませたという。

それからしばらくして実際にこの地を訪れたわたしが初めに目にしたものは、遠くの山の斜面にデカデカと描かれた D-V-X の三文字だった。二万本の松を植林することで形どられたそれは、ドゥーチェすなわちムッソリーニへのオマージュで、いうまでもなく、ファシズムの時代につくられたものである。天気がよければローマからも見えるらしい。土砂災害を防止するためでもあるのだろうが、こんなものが今でも残されていることに、ちょ

っとビックリしたのを覚えている。

とにかくサビーナ地方はそれだけ首都ローマに近いのだ。そのため国の役所や大企業に勤めに出ている人もたくさんいて、経済的に比較的豊かなところだといえるのではないだろうか(少なくとも、南のカラブリアから来ているわたしの目にはそのように映る)。しかしこの地方のほんとうの豊かさは、その自然にある。山、川、森、野原。深い緑色の景色と土や草の香りに、心も体もいつの間にか癒されている。こういうところで一生のんびり暮らしていけたら幸せかも……そんなことを思わせてくれる、実に平和的な田舎なのである。



【トウラーノ湖から見たカステル・ディ・トーラ】

サビーナ地方でわたしがいつも拠点とするのは、カステル・ディ・トーラというところだ。美しいサビーナ地方の中でもとりわけ美しいと評判の、湖のそばに立つ小さな村である。人口はたったの270人。といっても、夏場は帰省してきた人たちや観光客が加わるから、そこそこにぎやかになる。

ここにわざわざ遠くからやってくるのは、わたしの夫の家がこの村に縁があるためだ。わたしたちだけではなく、ふだんはローマなどで働いている親戚がみな、夏休みになるとここに来る。通りのあちら側の家におぼさんが、広場に面したあそのアパートメントにいとこが、というかんじで、村中に親戚が散らばって滞在していて、年に一度だけここで顔を合わせることになる。今年はこれまでとは違って、会社に出る必要もなくなり、早々と村に巣ごもって、リモートワーキングをやっていた人もいるみたいだ。

一年にこの時期だけとはいえ、何年も、何十年もここに戻ってくる帰省組と、彼らを迎える住民たちは互いによく知る仲なのだろう。待ち合わせなどするまでもなく、自然とみなが広場に集まり、教会の入り口の段差のところの座りこんでクロスワードをいっしょに解いたり、立ったまま延々とおしゃべりを繰り返したり、それぞれ思い思いのことをして時間を過ごしている。地元ネタや懐かしい思い出話などになかなかついていけず、特に共通の話題というものをもたないわたしは、ベンチに腰かけて広場のようすをぼんやり眺めているだけのことも多いのだが、だからといって周囲から浮くということもない(まあ、浮いてもまったく問題ないのだが)。

わたしが寝泊りする家は村の中ではなく、湖にかかる橋をわたった先の小高い山の上にある。家畜小屋として使われていた建物を改修した、石造りの家である。

家の隣、というか周囲は一面、原っぱである。湖岸から家までの急な坂道を歩いていると、ヒツジの群れに出くわすなんてことはしょっちゅうだ。ときどき用心深い牧羊犬に吠えられ、追いかけられたりもする。深夜にどこからか迷い込んだ牛が一頭、のそのそと歩いているのを見たこともある。

この家では携帯もインターネットもつながらない。

水道もつい数年前までなかったくらいだ。そんなところでわたしはブラックベリーを摘んだり、野良ネコにエサをやったり、庭で本を読んでウトウトしたりしながら過ごしている。大したことは何もしていないのに体はほどよく疲れて、昼も夜もぐっすり眠れる。退屈することも確かにあるけれども、時間なんて本当にあつという間にたってしまうものだ。



【筆者が滞在する家】

これまで毎年、とにかく「のんびりすること」を第一に、特別な計画をたてることなく夏休みを過ごしてきたわけだが、今年は新たな楽しみが一つできた。というのも、近くにちょっとおもしろいウォーキングコースを発見したからだ。家から山の奥のほうへむかって、いつもとは違う道を歩いていたとき、〈聖ベネディクトゥスの巡礼路〉と書いてある、小さな看板を見つけたのである。

そういえば、このあたりは聖ベネディクトゥスゆかりの地だ。480年頃、サビーナ地方の北部に位置するノルチャという小さな町の裕福な家庭に生まれた(ノルチャは聖ベネディクトゥスの生誕地としてだけでなく、生ハムの産地としても知られている。2016年の地震で大きな被害を受け、まだ復興をとげていない。わたしは地震以来、応援の意味をこめて、生ハムはいつもノルチャのものをかうようにしている)。

ベネディクトゥスは学業のためにローマに出るが、ほかの学生たちの荒れた生活ぶりを見てひ

どくショックを受けたらしい。そしてすべてを捨てて、神にみずからの人生をささげる決心をしたという。そこでローマの東、スビアーコ付近の洞窟にこもって隠者として暮らしはじめた。やがて名声を得て、ベネディクトゥスは付近の修道僧グループの長として迎え入れられるのだが、意見の対立が原因で、仲間たちに毒殺を企てられるほど憎まれたらしい。彼はその苦い経験から、これからのキリスト教の修道生活は、社会から孤立した隠遁生活ではなく、他者との協働に基づいたものでなければならないと悟ったようだ。ベネディクトゥスはさらに南へ移動して、モンテカッシーノの山の上に修道院をつくった。これが祈りと労働を基礎とする、ベネディクト会の最初の修道院である。



【ベネディクト会修道院跡】



【十字架とbがシンボルの〈聖ベネディクトゥスの巡礼路〉】

さて、わたしが偶然発見した〈聖ベネディクトゥスの巡礼路〉は、ノルチアからスビアーコをへてモンテカッシーノに至る、全長およそ 300 キロの道のりである。徒歩とマウンテイング・バイクの二つのコースがある。巡礼路に行くのに、信者である必要はない。これといった決まりもなく、参拝したりお札を集めたりすることもなさそうだ。ベネディクトゥスの歩んだ人生や彼の教えに思いをさせつつ、まわりの人と助けあって生きていけることの幸せを再確認する機会にでもなれば、それで十分なのではないかと思う。

わたしが滞在しているカステル・ディ・トーラはこの巡礼路の真ん中あたりに位置する。ここから南へむかうコースは山道で、高低差も激しく、かなりハードそうだ。一方、北へむかうコースは湖岸沿いの道を行くもので、これなら体力に自信のないわたしでもなんとか歩ききれそうだ。いざとなったら、だれかに車で助けに来てもらえるという安心感もある。しかも到着ポイントとなるロッカ・シニバルダは、小さい頃に読んだ絵本『いばら姫』を思い出させるお城がある町で、ずっと前から気になっていたのだ。

よし、今年の夏はロッカ・シニバルダをめざしてウォーキングに励むことにしよう。いつか、スビアーコやモンテカッシーノの修道院にも行ってみたい。

(元当館スタッフ)

わたしとロダーリ⑩

灼熱のポローニャとジェラートの宮殿

竹田 理乃

毎年、酷暑も盛りを過ぎてくると、小学校時代に音楽の授業で習った〈夏がくれば思い出す〉というフレーズが、ふと耳によみがえる瞬間がやってきます。はっきり申し上げて私は音痴ですので、合唱というのはあまりいい思い出ではないのですが、子ども心にも「夏の思い出」のさわやかな歌詞と晴れやかなメロディの美しさはきちんと沁みていたようです。辛抱強くピアノを弾いて歌を教えてくださいました先生の忍耐に感謝すべきでしょう。

ところで、残念ながら名曲の舞台を訪れる機会を得られていない私には、そこへ続くはるかな尾瀬 とおい空〉の歌詞にあまりピンとくるものがなく、ここから先はいきなり魂をイタリアへ飛ばしがちです。青い空、灼けつく太陽、光が強いただけ濃くなる影の暗さ、溶けていくジェラートの甘さ。一度きりのポローニャの夏、オープンのように熱気をため込むポルティコの陰を歩き回った思い出は、とても水芭蕉のなかをそぞろ歩くような気持ちのいいものではありませんが、私にとっては最も鮮烈な夏の思い出です。

イタリアは太陽の国ですが、夏を満喫しようと思えばポローニャはおすすめできません。ちょうどこの2021年7月にユネスコ世界遺産への登録が決まったばかりのポルティコ、つまり旧市街地に張り巡らされている総距離62キロにも及ぶアーケードは、直射日光を遮ってくれる反面、街路に蓋をしているようなところもあり、私の意見ではどちらかというと冬向けの仕様に思われます。夏は暑くて冬は寒いという土地柄なので、できれば春か秋の穏やかな季節に、赤レンガの街並みが醸し出すしっとりとした雰囲気を楽しんでいただきたいのですが、夏か冬しかないのならば冬をおすすめします。

冬のポローニャはロマンチックですよ。薄暗い

街角にぼうっと光る窓の明かりや、マフラーのなかに首をすくめてバールやエノテカに駆け込んでいく人影。チョコレートカルダを片手に眺める白い雪と赤い街並み。冷たい朝日のなかの教会や、静かな博物館、美術館。レストランで食べる温かいラザーニャ。クリスマスの電飾と巨大なツリーの輝き……。交通の便がよいので、ポローニャを拠点にすればヴェネツィアのカーニバルにだって日帰りで参加できちゃいます。

ひとつの街に暮らすように滞在するにしても、精力的に近隣都市を飛び回るにしても、ポローニャには理想的な条件がそろっています。



【マッジョーレ広場】

出典：<https://visitaly.jp/region/emilia-romagna-bologna/>

夏のポローニャに話を戻すと、イタリアの児童文学作家ジャンニ・ロダーリは、この都市にジェラートの宮殿を建てています。各地に暮らす子どもたちのために、彼はさまざまな都市をその作品中に登場させてきました。身近な地名がお話のなかに出てくると、それだけでも嬉しいですし、空想がぐっと具体的になりますよね。また現地の暑さが身に染みている人には、実感からお話の愉快さが跳ね上がるように思われます。

ロダーリがジェラートの宮殿の立地として選んだのは、ポローニャ旧市街地のまん中にあるマッジョーレ広場です。ドウオーモであるサン・ペトロニオ大聖堂と、政治の舞台として使われていた宮殿たち、そして市民の胃袋を支える中央市場への入り口に囲まれたこの広場は、まさにポローニャの大広間です。式典やお祭りが行われたり、野外映画祭やフードフェアの会場になったり、なにかあるとマッジョーレ広場には人が集まります。エン

ツォ王宮殿の向こう側を東西に走るリッツォーリ通りが、古代ローマ時代に敷かれたエミリア街道の現在の姿であることを思うと、今もあの場所が都市や地方の中心であることが、当然のようでもあり、奇跡のようでもあります。

そんなポローニャの心臓部に建てられたジェラートの宮殿をひと舐めしようと、子どもたちがく遠くからやってきたとされているのですから、きっと赤レンガの旧市街はもとより、街道の果てからも夢のような噂を聞きつけた人たちが押し寄せてきたことでしょう。なにせく屋根はホイップした生クリームで、煙突から出る煙は綿菓子、煙突はドライフルーツ)でできていて、それ以外は扉も壁も家具もジェラートなのですから、時間との勝負です。イチゴ味の窓が溶けだしてしまっているのを、市役所からきている警備員さんが指摘しているように、事態は急を要しています。もう子ども達だけの食欲ではどうにもなりません。この傑作を食べ尽くすには、みんなの力を合わせる必要があります。

この日、マッジョーレ広場に駆けつけることのできた幸運な方々は、幸いにも誰ひとり腹痛を起こすことなく、すばらしい一日を過ごすことができました。そのすばらしさは短編集『パパの電話を待ちながら』の語り手であるピアンキ氏が、出張先からかけた電話でお嬢さんに語ったとおりです。

そろそろ物語から足を踏み出して、空想と現実のポローニャのあいだをひとり歩きしてみるのも楽しいですね。マッジョーレ広場の横手には広くオシャレなサラボルサ図書館があるので、本を読みながらひと休みした人もいたことでしょう。山盛りのジェラートで身体が冷えてしまったら、晩ごはんにはトルテッリーニがよさそうです。たまご色のパスタにお肉などの詰め物をして作るトルテッリーニは、金色のブイヨンスープで食べるのがポローニャの定番。冬に恋しくなる料理ではありますが、夏にだってさらっと美味しいだけちやいます。少し運動してから帰りたければ、一泊してハイキングに出かけてみたいところです。目的地には山のうえにあるマドンナ・ディ・サン・ルーカ教会を定めてみましょう。もちろんバスも出ていますが、古い城壁の南西にあるサラゴツァ門の近くから、延々と続くポルティコの参詣道を頂上まで

登ってみればいい運動になります。終着点に広がる眺望の清々しさも喧伝したいのですが、日本人の皆さまには参詣道のポルティコの魅力も語ってみたいくなります。伏見稲荷大社の千本鳥居のような、瞑想的な雰囲気がお気に召すかと思われるます。くれぐれも飲み物の持参をお忘れなく。

さて、無事にサン・ルーカから下山できたら、もうひとつくらいジェラートを食べたって罰は当たらないでしょう。



【サン・ルーカ教会】

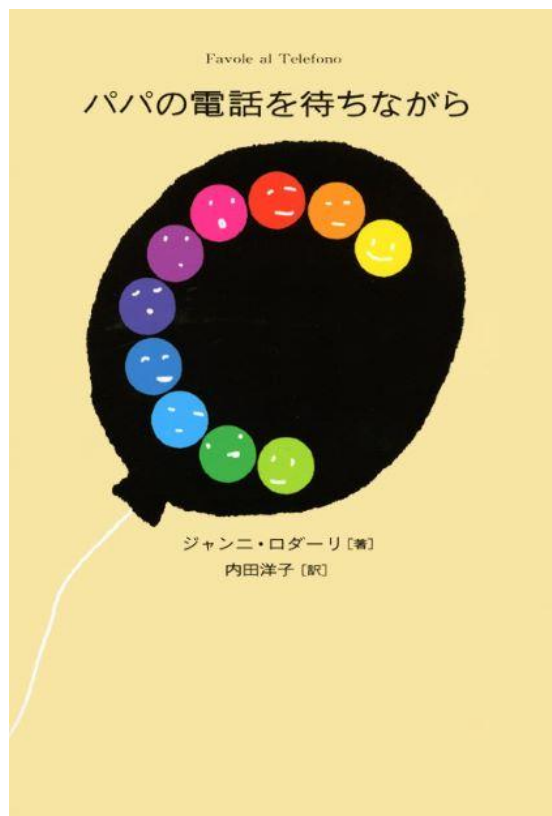
出典: <https://visitaly.jp/region/emilia-romagna-bologna/>

イタリアではどこにだって、近隣住民の自慢になるようなジェラテリアがあるものです。ポローニャほどの都市ともなると、みんなで力を合わせたらロダーリの描いたジェラートの宮殿だって本当に建てられてしまいそうなほど、あちらこちらにジェラテリアが見当たります。

これは友人からの受け売りで、本当なのかどうかを調べたことはないのですが、彼女曰く、ポローニャでジェラートを食べるならミルク入りのものに限るのだとか。なんでも、肥沃な大地でのびのびと育てられた牛の乳から作る乳製品は、どこに出しても自慢になるとのこと。なるほどねと頷いておきましたが、私としてはちょっと列車で走ったあたりに広がるサクランボや洋ナシの果樹園や、市場に山積みのおレンジが印象的なので、つい友人を裏切ってフレッシュなフルーツを使ったジェラートを選びがちです。なんにせよ、美味しいものを惜しみなく教えてくれる友だちは宝物です。

思い出してみると、機会があつてキッチンを見学させていただいたジェラテリアは、フルーツが自慢のお店でした。当時は私のイタリア語もまだ

拙く、せつかくの解説も上手く聞き取れなかったの
で、楽しくも悔しい思い出になってしまいましたが、
自分の仕事を誇らしげに語ってくださった従業員
さんの熱意には、イタリアの食文化に対する敬意
を新たにさせる輝きを感じられました。イタリアで
夏を過ごせば、初めて食べたジェラート、友だちと
食べたジェラート、優雅に寛いで食べたジェラート、
疲れ果てて食欲もなく最低限の栄養補給のため
に食べたジェラートや、お気に入りの特別なジェラ
ートと、ジェラートにまつわる様々な思い出が積
み重なっているはずで。



【『パパの電話を待ちながら』表紙】

出典: <https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000184753>

今、地図を見下ろしていると、あの通りにもこの
通りにもジェラートをぱくついた場所が散らばって
いて、喉元過ぎて熱さを忘れてしまえば、なんだ
か灼熱のポローニャでもそれなりに涼しく過ごし
ていたような気がしてきました。もちろん、勘違い
です。ジェラートくらい食べておかないとやってい
けなっただけ。やっと秋が来たときの安心感は
忘れられません。

それでも、やっぱり慕わしい。よそ様に「その時
期は……」と待たされたをかけたくなるほど厳しい暑さ
を経験したにも関わらず、夏がくれば思い出ずポ
ルティコの向こうの空の青さ、ジェラートの甘さ。と
にかくポローニャが恋しくなってしまう。旅行先と
いうのは、あながち快適さだけで選ぶものでもな
いのかも知れません。

【参考文献】

『パパの電話を待ちながら』(ジャンニ・ロダリー著、内田洋
子訳、講談社、2009)

(元当館語学講師)

～会館だより～

<秋の無料体験レッスン>

10月からの秋学期に先だって、無料体験レッスンを
開催いたします。この機会にぜひ新たな世界への扉
を開けてみましょう！

●イタリア語

京都本校： 9月30日(木)11:00
10月2日(土)11:00

四条烏丸： 10月4日(月)19:00

大阪梅田校： 9月29日(水)11:00
9月29日(水)19:00

●スペイン語

京都本校： 9月28日(火)16:00

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>